

「統一ヨーロッパ」意識の現代ドイツ文藝理論における諸反映（その一）

高橋，義孝

<https://doi.org/10.15017/2332921>

出版情報：文学研究. 45, pp.41-46, 1953-03-10. 九州文学会
バージョン：
権利関係：



「統一ヨーロッパ」意識の

現代ドイツ文藝理論における諸反映 (その一)

高 橋 義 孝

ドイツ・ファシズムは軍事的、政治的に徹底的な敗北を喫した。そしてかつて三十年戦争当時グスタフ・アードルフを招いたやうに、今日ではアメリカ、ソヴェトその他の国々をドイツの国土の上へ招く結果に終つた。ドイツがともすればドイツ以外の国々の経済的、政治的、そして精神的諸勢力の闘技場になるといふ、あの「悲劇」が今日再び繰り返されてゐる。たしかにそれはドイツ・ファシズムの罪過である。善き功績とは（人間の健全な感情にとつて、厳密にいふならば）一つの重語であらう。しかし悪しき功績といふ言葉は コントラディクトORY・イン・アディエクト 形 容 矛 盾 であらうか。——と私は一九四九年に書いた。

——ドイツはアメリカとソヴェトとをドイツ自身の許へ招いたばかりではなく、ヨーロッパの国々へも招き寄せたのである。第二次世界戦争はヨーロッパの国々にとつて、アメリカとソヴェトとをいかなる意味でも、第二次世界戦争以前の時代におけるやうには絶対に無視しえぬものとしてしまった。今こそ人は事実上の「西洋の没落」について語りうるのである。これは紛れもないヨーロッパの体面失墜であらう。すなはちヨーロッパの、一つの文化統一体としての

ヨーロッパの。しかしヨーロッパは、ただそのやうな体面失墜によつてのみ初めて可能にせられるやうな精神の高揚を今日体験しつつあるのではなからうか。換言すればヨーロッパのより高き良心は、ヨーロッパが一つの文化統一[＊]であることを断念せざるをえぬことによつて、却つて一つの文化統一[＊]——アメリカやソヴェトのそれに相並ぶ、いやヨーロッパ人の意識においてはむしろそれらに優る一つの文化圏であるといふ自覚を持ち始めつつあるのではなからうか。ヘラスとクリスト教とが、真正のヨーロッパ的精神財宝として新たに眺められだしてゐるのではあるまいか。体面失墜と、更に深い自覚と——これはヨーロッパの二十世紀におけるノウム、ヨーロッパの「自己止揚」と呼ばれてしかるべきものであらう。第二次世界戦争の終結を以つて、近世初頭以来のヨーロッパ文化の独裁期は終りを告げる。ヨーロッパの文化は世界文化の疑ひもなく有能な一員として出発する。もとよりこれはヨーロッパにとつて苦痛を意味するであらう。しかしそれは本来の健康を、すくなくとも倨傲からの健康を約束する苦痛である。悪しき功績とは決して限定矛盾ではない。ナチス・ドイツはヨーロッパの「若返り」（ヘーゲル）にたいして一つのネガティブな寄与をなした。それがナチスの「悪しき功績」であつた。

＊ 拙稿「浪漫主義とドイツ・ファシズム」（現代世界文学講座）・ドイツ編、新潮社、昭和二十五年四月、二三六頁以下。）

一九四九年、以上のやうな文章をなんの資料も参考書類も持たずに誌した私が、「社会統体」[＊]とも訳せられるべきトインビーの society といふ勝義における歴史哲学的概念を知つたのは最近のことであり、又、「ギリシア・ローマ的、クリスト教的・ラテン的・ゲルマン的要素の融合から生起し、のちに特定のスラヴ的諸要因の参入によつてその完成を見た一文化統一[＊]」としてヨーロッパといふ概念、換言するならば「統一ヨーロッパ」意識の醸成と増大とを証拠づけるやう

な数々の材料に漸くにして接することができるやうになつたのも最近のことであつた。

* A. Toynbee, A Study of History I, 1935², S. 15 ff. (F. W. Pick, Studie zur Weltgeschichte, 1949, S. 24 ff.)

* P. E. Hübinger, Spätantike und frühes Mittelalter, Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte, 26. Jahrg. 1952, 1. Heft, S. 15.

*** たとは「ドイツ青年の座談会」(雑誌「改造」昭和二十八年二月号)における「ドイツ青年の次のやうな発言。「しかし、ナチスの失敗によつてわれわれドイツ人は目ざめたのです。それと同時に、ヨーロッパも目ざめてきました。ヨーロッパは一つでなければならぬ。すべてのヨーロッパ人が真剣にそう考えるようになりました。もちろん、政治的にはまだ多くの困難な問題を残してはいますけれど、少なくともヨーロッパは次第にその方向に向いつつあると言えます。」(そのばあい、中心となる理想、イデオロギイはどのようなものか?)「それは、ヨーロッパの文化です。ヨーロッパには、キリスト教とか、ルネサンスとか、科学精神とか、いろいろ豊かな精神財がある。この精神財を共有しているという、つまり文化的な連帯意識が、ヨーロッパを一つにむすびつけるわけです。といつても、なにもそれは観念的なものではなく、きわめて現実的なものです。」(傍点筆者)

精神生活のある部面における変化や動きが、必ず他の諸部面における同様の変化や動きを呼び起すといふことを、その比類ない特色とするヨーロッパ精神生活において、このやうな「統一ヨーロッパ」意識の成立はまた現代のドイツ文芸理論にも精密に反映してゐる。われわれはこのやうな反映の若干を、たとへばヴェルナー・ミルヒの小著「文学史の諸課題と諸限界について」(Werner Milch, über Aufgaben und Grenzen der Literaturgeschichte, Wiesbaden 1950.)に窺ひ知ることができよう。

ミルヒの論稿における、注目せらるべき第一の点は、国民文学と世界文学とを抑へて、彼が「ヨーロッパ文学」及び「ヨーロッパ文学史」を強調してゐる事実である。通例、世界文学といふ文学史的概念はその対蹠者に国民文学といふ同じく

文学史的概念を持つ。さてしかし世界文学とは抑々いかなるものであらうか。それは、これまでに書かれたすべての文学作品を指すのか、或はゲーテが考へたやうに一国民文学から他の国民文学へと影響を及ぼした偉大な作品を指すのか。いづれにせよ「一般文学史」といふやうなものはまだ存在せず、文学史にとつてここには未解決の問題がひそんでゐる。それもドイツにおける文学史の成立事情を顧みるならば無理からぬことであらう。蓋し文学史は、国民文学といふ概念が漸く行はれ始めた時代に初めて成立した、極めて年青い学問分科である。国民文学は当然国民を前提とするのみならず、あの国に属する個々人が自分の母国語と呼ぶ言語で一人の偉大な詩人が文学作品を創造したといふ事実にたいする誇り、国民感情を前提とする。かつてゲーテはシラーを追憶して「蓋し渠、われらの一人なりき」といつたが、この「われら」とは全世界の知識階級の所屬員のことであらうか、或はまたワイマルの人たちを指すのであらうか、或はまたその言葉と精神とがシラーの作品の裡に言語となり型態となつたドイツ人をいふのであらうか。十九世紀はこの第三番目の解答を採つたし、文学史は、すなはち十九世紀の子としてむろんこの解答を權威づけた。ドイツ人が今日文学といふ時、彼は一つの国民文学を、すなはちワルター・フォン・デア・フォーゲルワイデからリルケに至る統一的文文学を、チヨースーからエリオットに至る連統的文文学を考へるのである。言語は諸文学を相分つ限界を形成してをり、最高の文学はもはや翻譯せられることも移植せられることもないから、このやうな命題は論なく正しいし、又、意義深いといふことができる。しかしこの命題の正当性は条件づきであらう。なぜなら諸文学の、言語的並びにまた形式的、内容的に相異なる形成物への分岐は、相異なる諸国民文学が同一の根源に還元せられるといふことによつて絶えず修正せられる一つの發展だからである。国民文学といふものがヨーロッパにおいては、そのどの一つでも必ずラテン文学の偉大な伝統と相並び、或はその伝統の

中から発展してきたといふ事実を顧慮することなく、諸々の国民文学について語る者、一切のヨーロッパ文学の一つの根本的問題は、それらがホメロス、或はウエルギリウスをすべての文学の父祖として尊敬してゐるといふ点に存するといふことを見逃すやうな者は、無益にもわれとわが視野を狭ばめる者にほかならない。さういふ人間は恐らく現代の文学潮流のあれこれを解明することはできようが、ヨーロッパの文学的伝統をその連続的發展において捉へることはできないであらう。つまりわれわれは——とミルとはいふ——世界文学と国民文学といふ合言葉の間に第三の合言葉「ヨーロッパ文学」を挿入し、諸々の国民文学を一つの世界文学に対置せしめるよりも、一文化圏の統一性について語るべきであらう。今日まで行はれてきた世界文学の歴史はただ並列的に支那、印度、エジプト、ギリシア、英国、ロシア、ドイツ、スウェーデン、アメリカの文学を、恰もそれら諸文学が一樣に同一の意味において国民文学であるかのごとくに取扱つてゐるが、さうではなしに、一般的文学史といふものがあるとするならば、それはまづ第一に、クリスト教的及びヘラス的理念財の上に築かれたヨーロッパの文学を、他の諸文化圏から分離し、ソクラテス及びクリストウス以来、ヨーロッパにおいてはある特定の文学観が成立してをり、それがたとへクリスト教的・人文主義的思想を敵に廻す時といへどもなほかつヨーロッパ的諸根源にたいして種々の關係を有するといふことを証明すべきであらう。そしてかかるヨーロッパ文学は一箇の統一体であり、世界文学ではないが、しかしヨーロッパの言語的に相異なる諸国民文学を抑々初めて可能にするところの超越的關聯ではあらう。問題は世界文学と国民文学とを対立せしめることにではなく、逆に課題はホメロスから今日までの二十七世紀を概観することである。ヨーロッパの文学史の課題は次ぎの点に存する、すなはち種々の言語的並びに文化的關聯の分岐過程と、それらの分岐的諸發展の、汎ヨーロッパ的、歐洲的文化統一体への逆行的動きとの把握である。

世界文学といふ概念からするならば「低下」を意味し、国民文学といふ概念からするならば「上昇」を意味するところ、かかるパースペクティヴの推移現象こそ、「統一ヨーロッパ」意識の現代ドイツ文藝理論における第一の反映と見なして差支へあるまい。ヨーロッパ人の取扱ふべき文学史的視野の狭隘化乃至は拡大といふ、現代ドイツ文学史家のかかる提唱も、いふまでもなく実はかつてニコライ・ベルチャイエフが「しかし潰滅しつつあるのは国家のかくかくの形体ではなくして、正に国家そのものである」といつた時、またトーマス・マンがノーベル賞を授けられたヘルマン・ヘッセに書き送った祝賀の書簡中に「国家とは今日一箇の絵画的価値たるにすぎない」といつた時になされた預言的想念に密かに通ずるものを持つてゐるのである。

* ニコライ・ベルチャイエフ「現代の終末」（荒川龍彦訳、生活社、昭和十八年、一三五頁。）

（未完）